

キーワードはリセット〈磨きなおし〉

きたむら せつこ
北村 節子

日本人の人生は長くなって今や世界一。めでたいことですが、長い年月、自分を養っていくのは大きな課題でもあります。加えて社会は複雑になり技術は日進月歩。社会の構成員としてその時々に必要な技能を発揮して働くことが求められます。現代は、誰もが絶え間なく自分を「磨きなおす」ことが求められている時代です。

そういう「時代的宿命」の中、置いてけぼりにされがちなのが女性です。出産・子育て・介護などで仕事を中断することで、働き続けていれば現場で自然に得られたはずの「磨きなおし」の機会を失ってしまい、その結果、「子どもを産んだら社会復帰しにくい」「期待通りの職に就けない」こととなります。そしてそのことが「結婚できない」「子どももてない」という少子化を招いている面もあります。企業としては「中断しがち＝技能を失いがち」、「だから女は採用しない」という論理を持ち出すことになってしまうのでしょうか。

もしも、人生の節目にきちんとした「磨きなおし」の場が十分にあったら…。誰もが時代のニーズに合った知識、技能を適正なタイミングで身につけることができたら…。出産や介護で一時期、第一線から去っていた女性も、さっそうと次のステージに立つことができるはずです。社会から時には支えられながら、社会を支える力も発揮する人生。それは個人にも社会にも充実と安定をもたらすはずです。

経済が地球単位で回る今日、少子高齢化で労働力が逼迫する日本社会で女性を「磨きなおす」ことは、個人、組織、誰にとっても“お得”な処方箋ではありませんまいか。そしてこれがうまくいけば、「流動的産業構造」下で揺らぎ出した男性たちにとっても、すてきなモデルになるのではありますまいか。私たち、長い人生を生きる日本女性には、自らをリセットする勇気が、そして日本社会にはそのシステムが求められています。

■プロフィール 1949年長野県生まれ。読売新聞社調査研究本部主任研究員。内閣府男女共同参画基本問題専門調査会専門委員。国際協力事業団WID懇談会メンバー。1972年読売新聞社入社後、編集局社会部、婦人部、電波報道部、生活情報部などを経て現職。著書・論文に、『専業主婦の消える日』『シングル・ウーマン』（共著、有斐閣）、『ピッケルと口紅』（東京新聞社）、『縁辺労働力が現代の労働市場に及ぼすもの』（大蔵省印刷局「ワークスタイル革命」所収）ほか多数。